

## 第4回「関西建築家新人賞」審査講評

関西建築家新人賞も4回目となり、関西の若手建築家の登竜門としての役を担ってきていると思われる。今回その審査委員長の大役を引き受けることとなり、審査委員を高砂正弘氏と宮城俊作氏のお二人をお願いした。高砂氏は、シンプルな中に奥深い意味がくみ取れる独自の空間構成で住宅を設計しておられる建築家である。また宮城氏は建築家とのコラボレーションにより数々の優れた作品を残されているランドスケープ・アーキテクトで、建物と敷地の関係性や、周囲の環境との調和に対する評価を賜りたく、お願いする事にした。

選考の基準は特に設けず、各個人の感性に任せることとした。

今年度は昨年を上回る20人の応募があり、書類審査を重ね5人を現地審査の対象とした。

長田直之氏による共同住宅「CUR」は全員の意見がまとまった。ただ、その他の作品は建築主の要望や場所性の巧みな処理に対する評価はあるものの、一步抜け出たところが見いだせず、今回は一人のみの受賞と決定した。現地審査の緊張感を味わいながら、悩み抜いたなかでの結論である。各応募者にはご理解を賜りたく思う。

最終選考にもれた建築も、評価に値する作品であることを申し述べておきたい。

また、この場をかりて、現地審査では暖かく迎えてくださった建築主に深くお礼を申し上げます。

### 受賞作

「CUR」 長田直之

JR 芦屋駅近くに建つワンルームマンションである。1階をピロティで持ち上げ、その上2階から4階までは「く」の字型の住戸を配した平面構成が、北の道路側に屏風のように折れ曲がった変化のある立面を形成し、光と影が余白の美しさを感じさせている。また道路側に空地を残すなど、街並形成に積極的に貢献しようとする建築家の意図が見て取れる。街路への配慮、住戸の眺望確保等、限られた予算と様々な条件のもとで、建築家の力量が感じられる秀作である。

#### 次点作品

##### 「神領の家」 北脇一郎

住み手の要求をうまく処理した思い切った住まいである。新しく開発された住宅地の中で、なぜここまで閉ざす必要があるのかには少し疑問は残るが、外壁にコールテン鋼に伝統的な大津壁を調和させ、周囲と同化させようとした意図もうかがえる。コールテン鋼と溶接部分のサビが、軽快なディテールによる外観の美しさを減じているのが残念である。

内部は、閉ざすことで近隣の視線を感じることなく、トップライトと2階の庭へとつながるガラス窓を持つ吹き抜け空間で、外観から想像できない開放性を感じさせる。通風も考えられた大胆な空間に住み手への配慮がうかがえ、外部の材料の挑戦、独特の内部空間の創出に建築家の力量が感じられる。今後の可能性を期待する事にした。

##### 「コトバノイエ」 矢部達也

本棚が構造と間仕切りとなる開放的な住宅である。施主とのコラボレーションによる住まいが心地よい。決して大きくない空間を広々と見せているのが室内床と同じレベルで広がる北側のテラスである。また、2畳の閉じた空間が他の開放空間と対比され、なくてはならない籠もり部屋として存在する。建築費からして、よく考えぬかれた住宅ではないだろうか。また、応募資料の建築主のコメントもすばらしいもので、もし入賞となれば建築主へ賞さしあげたく思えるものであった。

シンプルにまとめられた住宅であるが、住宅は古びることにより味わいが出るものであることを考え、塀の処理や、ディテールにもう少し細かい配慮があればと惜しまれ、受賞にはいたらなかった。

##### 「苦楽園の家」 末包伸吾 + 山崎康弘

阪神間という敷地の環境を巧みに読みとり、住まいの快適性を創り出している完成度の高い建物である。眺望のため設けられた開口の取り方、流れるような動線と諸室の配置は見事で、ドラマチックに入る光の読みも申し分ない。すべてが計算し考え尽くされた空間の中で、すこしバランスがくずれても「遊び」により味わうことができる楽しさがあっても良いのではと感じられた。この高い設計手腕を生かして、次への挑戦を試みてほしい。

##### 「風の教会」 松尾和生

書類審査で評価が高く、期待して現地に向かった作品である。

内部は、光のうつろいと風のながれを感じさせる巧みな演出が人の心を優しく包み込み、聞こえてくる聖歌の響きに心洗われる思いがする空間であった。ただ、室内に比べて、外観処理に無理があり、高度にまとめられた建物故に悔やまれる。こころにふれる空間を創れる実力の持ち主であり、次作を期待したい。

要項書の冒頭には、「地域特性に対する配慮や作品の芸術性などの観点から総合的に判断し、将来性があると期待される建築家を選定するもの」と書かれている。おそらく、この審査に求められる視点は、「地域性」「芸術性」「将来性」にあるのだと思った。それを念頭において、桜が咲き誇るなか、滋賀県から兵庫県までの5作品を見させていただいた。

#### CUR 長田直之

応募書類を見た時から気になった建築である。1階が店舗で、2階から5階が各階5戸のワンルーム賃貸集合住宅である。日当たりが良い南側に廊下を設け、北側にベランダを設けていることと、住戸が「く」の字形に折れ曲がっていることが従来の集合住宅とは違うが、ここに強い意志を感じた。さらに、道路側のベランダの大きさと形とを縦層ごとに変え、外観に変化を与え、景観への配慮もされている。何度も模型でスタディを繰り返したことも納得ができる。1階の店舗がネイル・サロンで、計画で想定されたカフェなどの街に開かれた店舗では無いのが残念ではあるが、このことで、この建築に対する評価が揺らぐことはなかった。

#### コトバノイエ 矢部達也

私が推したこの住宅は、簡素で割切りがよい。たくさんの本を収納するために、棚壁と名づけた家具で屋根を支えたワンルームの住宅は、ローコストながら居心地が良い。しかし、この建築の生命線ともいえる道路と敷地との境にある板のスクリーンに、建築との一体感が弱く、板塀を廻らせたように見えてしまった。

#### 神領の家 北脇一郎

高圧鉄塔を視界からカットするために、コルテン鋼板と漆喰の外壁とし、窓がほとんど無い。そのため、ほぼ居間全体にトップライトを設け、室内に自然光を入れている。これにより、内と外とが反転したかのような錯覚をつくり出すことに成功している。ただ、吹抜けにあるブリッジや手摺など、コンセプトを補強する脇役の扱いと、閑静な住宅街には異質な外観が最後まで気になった。

#### 苦楽園の家 末包伸吾、山崎康弘

端正な白い外観が、必要とされた高いグレードの空間を包み込んでいる。南側と北側に平行で東西方向の動線を設け、その間に各居室が配置されている。完成されたこの構成には破綻や迷いは無く、明解である。しかし、どこかほっとするような空間の淀みのような場所がほしいと感じた。

#### 風の教会 松尾和生

デザイン密度が高く、建築主にも愛されている建築である。水や光などの自然を巧みにコントロールし、空間を生み出す力量は新人の域を越えているかもしれない。ただ、形の必然性について、納得できる答えを見つけることが出来なかった。勝手に想像していた、素朴な祈りの空間とも趣が違った。

現地審査に先だって自分なりに考えていた基準は2つ、キーワードは「応答」であった。ひとつは、建築がその立地環境とどのような応答をしているか、ということ。いまひとつは、様々な設えの中に施主との応答の過程を垣間見ることができるか、ということである。これらの基準は、対象となった作品群が、個人住宅3件、集合住宅1件、教会1件、という構成であったことにもよる。

ひとつめの基準に関して言うならば、大きなトップライトを通じて天空との垂直的な応答をめざした「神領の家」、それとは対照的に地面との繋がりから敷地周辺との水平的な応答をめざした「コトバノイエ」、敷地内外の眺望を組み込み、丘を回遊するかのようなシークエンスを形成した「苦楽園の家」、そして埋め立て地のおおらかなスケールと光の環境を存分に取り込んだ「風の教会」、いずれもが期待どおりに、設計のプロセスにおいて、建築が立地する環境との間に様々な応答を重ねたであろうことを想像させるに十分な空間を造形していると感じられた。

ふたつめの基準に関して言うならば、施主がエンドユーザーである個人住宅と、施主がエンドユーザーとの間に介在する集合住宅や教会との違いはあるものの、いずれの作品においても、施主との信頼関係が十分に構築されているからこそその設えが随所にみられた。単なる使い勝手のよさやコスト配分、嗜好といったものを超えて、施主が真に欲していたであろう空間を、様々なメディアを巧みに操りながら引き出し、それを空間の実体にうつしかえることのできる成熟したコミュニケーションの能力をみてとることができる。

このような作品群の中でも、受賞作品となった長田直之の「CUR」は、これら2つの基準をクリアしているだけでなく、それらをより高い次元において統合した空間性と造形性を獲得していることは明らかであった。立地環境との応答という点では、既存の街路景観の中におさまりつつ、独自の存在感を主張するファサードが目をひく。ワンルールの集合住宅にありがちな単調さは見事に破られ、微妙な屈曲面の連続が街並みの形成を先導しているかの印象ですらある。このファサードは、「く」の字に折り曲げられた居室内部の平面形に由来するものであり、かつまた、面積的な制約の多い居室に豊かな空間性をもたらすという、両者の良き統合関係を成立させている。そしてこの関係が、施主がこの場所に求めた建築像、即ち、事業性にすぐれ、魅力的な街区や街並みの創造に寄与する集合住宅、として実体化されている。施主との応答の過程が、空間の設えを超えて、都市の設えに進化しているように感じられる。

審査委員 宮城 俊作